

国内サッカー第2種世代リーグ大会におけるプレー機会に関する研究

A study of the play opportunities in the domestic football second-class generation leagues

1K10C433 百瀬 雄紀

主査 平田竹男 先生

副査 中村好男 先生

【背景】

近年、日本サッカーのレベルは向上していると言われているが、世界トップレベルとの差は顕著である。対策として、長期的な育成年代の育成体制の構築を掲げ、近年では2011年に高円宮杯の大会編成が改革された。中でも西政治(2008)によって、国内では高校生にあたる第2種世代では育成のポイントとして試合での「プレー機会」が重要だという研究がなされており、特にリーグ大会の編成改善が求められる。また、FIFA ランキング1位のスペインでは、国内トップレベルに近い大会編成でリーグ大会が行われている。しかし、育成年代の育成体制について、大会編成における国内第2種世代の「プレー機会」に関する研究は無く、国内の現状が明らかになっていない。

【目的】

本研究では、国内第2種世代における「プレー機会」の現状を明らかにすることにあり、国内トップレベルのJリーグと同じリーグ戦方式の大会を分析し、今後の大会編成の改善の方向性を提言する。

【方法】

以下の育成年代、大会を調査対象とする。

<第2種世代>

高校生年代(16~18歳)

<高円宮杯U-18サッカーリーグ>

(高円宮杯U-18都道府県リーグの除く)

1. 高円宮杯U-18各リーグの大会編成や各地方または都道府県の登録チーム数を分析し、特徴を明らかにする。
2. リーグ戦においては、1シーズンの試合数と試合時間を掛けたものを「プレー機会値」とする。
3. 地方と都道府県においては、各リーグの出場チーム数、試合数、試合時間を掛け、登録チーム数で割ったものを「プレー機会値」とする。
4. 上記の調査から、全ての選手がより適したレベルや試合時間等の環境でプレーできているかを分析し、近年の改革で改善された良い点や今後の問題点を明らかにすることで、今後の方向性を示唆出来たとする。

【結果】

1. 高円宮杯各リーグにおいて、登録チーム数や出場チーム数に偏りがあり、多くは比例関係にあったが関東や東海、もしくはそれらに属する都道府県のような例外も

みられた。2. 「プレー機会値」では関東において、プレミアリーグで最も多くのチームが出場しており、強豪チームが多いにも関わらず、全都道府県が全国平均を下回っており、プレー機会を十分に得られていなかった。また、愛知県においては、登録チーム数が東海で最も多かったにも関わらず、「プレー機会値」が0であった地域を除くと、明らかに少なかった。3. プレミアリーグにおいては下位2チームが自動降格のため、様々なチームに出場機会はある。しかし、国内トップリーグのJリーグやスペイン第2種世代のリーグ大会と比べ出場チーム数や試合数が大幅に少なく、1シーズン毎ではリーグ大会に充分に出場できていない地域がいくつもあることが明らかになった。

【考察】

地方や都道府県による登録チーム数や出場チーム数の偏りは、国内トップリーグであるJリーグや海外トップリーグでもみられることであり、登録チーム数と出場チーム数がほとんどの場合で比例関係に近い結果となったことから、第2種世代における最高峰のリーグを目指した大会編成として、方向性に大きな問題はないと推測される。しかし、各リーグは8もしくは10チームで構成されており、1つの都道府県に際立った強豪チームが複数ある場合、登録チーム数に関係性のない偏りがでてしまう。東海にみられた、愛知県の出場チーム数が登録チーム数に対して極度に少なかった結果も、こういった要素が原因である可能性が考えられる。今後、さらなる改善が求められ、スペインのように国内トップレベルに近い大会編成で行うことで、各チームがそれぞれに適した環境で十分な「プレー機会」が得られることが推測される。むやみに試合数を増やすことで過密日程等の問題が懸念されているが、スペインと比べて明らかな差もあるため、適切な改善の行うための十分な時間の猶予があると考えられる。

【結論】

国内第2種世代におけるより適した育成制度を確立するためには、育成のポイントとなる「プレー機会」に着目すると、高円宮杯U-18サッカーリーグの出場チーム数や試合数といった大会規模の拡大を中心とした改革を行うことが、今後の大会編成の方向性において重要であることを提言する。